

The Cambridge English School

—Cambridge大学英文学科（学部）の人間と研究をめぐる—(1)

英米文学教室 岡村俊明

—はじめに—

どうしてCambridge English School (Cambridge大学英文学科、現在は英文学部) についての研究を私が始めることになったのか。きわめて個人的なことであるが、まずそれを書く必要がある。私は1984～85年の1年間Cambridge大学英文学部の客員研究員としてCambridgeで過ごし、その時痛感したことがこの研究の切っ掛けとなった。

日本における英文学研究者の人口は極めて多く、そして数多くの研究者が海外に出る。Cambridge大学にも毎年20名から30名の日本の英文学研究者が出かける。それにもかかわらず、海外での、焦点を絞って言えば、Cambridgeにおける日本の英文学者の存在感はどうであろうか——日本の英文学研究の貢献度を疑わせるほど、その存在感が稀薄である、と私には思われた。そこまで言う資格が私にあるかどうか甚だ疑問であるが、ともかく私にはそう思われたと繰り返す以外にない。それと対照的に、現在活躍している秀れたCambridgeの英文学者およびCambridge English Schoolの伝統をつくりあげた過去の研究者を見ると、私は圧倒されてしまう。彼等と日本の英文研究者の著しい差異はどうであろうか。勿論我々日本人にとって、英文学とはあくまで外国文学であり、よほど研鑽しても越えがたい障壁がある。近年は資料等の入手がはるかに容易になり、学界の国際交流も格段に盛んになったが、明治の英文学研究者でもあった夏目漱石の外国文学研究に対する絶望感は今日に至るも基本的には変わったとは思われない。外国文学研究は自然科学の研究とは異なり、時には人文・社会科学の多くの分野とも異なり、容易に国際水準に達しないものであろうか。

しかし考えてみると、外国文学研究の障壁は、障壁として残る部分と、逆に日本人の独特な研究方法の発展に至る部分に分かれるのではないだろうか。そして外国文学研究の華やかな部分の多くは、日本人にとって障壁として残る部分ではなかろうか。その不利な部分で多くの日本の研究者は、諸外国（特に英米）の研究の最新の動向を洩らさずキャッチし、彼等の手法を模倣（又は改善）し、彼等の研究の小さな間隙を埋めるべく懸命に努力し、埋めたと思っていると英米の研究は別な展開を見せている。かくして日本人の方法論は猫の目のように変わる、と言えば言いすぎであろうか。

さらに考えてみるならば、我々がその動向にたえず注目している英米の研究はそれほど変化の激しいものであろうか。英米各地の研究の秀れた最先端の情報を、わが国の研究者は競って紹介又は発展させようとするから、それははげしく変化していると思われる、ということもありうる。変わるものもあり、同時に不変なものもあるはずである。表面に浮き立って見える華やかな研究を支え

ている地道な土台があるはずである。それらを知るには、いわば「定点観測」が必要ではなかろうか。英文学研究で伝統あるところを取り上げ連続的に考察するのである。あるところで、長い歳月にわたって彼等が共有している研究の伝統と研究者個人の人間性と研究を連続的に調査・考察するのである。その調査と考察の結果から、過去、現在および将来にわたる諸外国の多岐にわたる研究動向を正確に評価することができるのではなかろうか。またそうすることこそ、我々日本人にとって研究の障壁にはならず、我々の個性にあった研究の方法を見つけ、それを新たにしかも意識的に展開できるのではなかろうか。この「定点観測」をこの際適用するならば、世界の英文学研究が流れ込み、またその成果を世界へ向けて送り出していった英文学研究の世界的メッカともいえるCambridge大学だけに限り、そこで過去および現在にわたり、同大学英文学教育・研究の歴史を作り、世界の英文学研究に多大の貢献をした人々を連続的に取り上げることになる。

一般的に言えば、Cambridge大学英文学者の専門は実に広い。小説・詩などの創作活動にも従事しているCambridgeの英文学者もおり、また批評活動、演劇活動という現実との接点を持ち、文学研究が空理空論に走ることも防いでいる英文学者もいる。翻って日本の英文学研究を考えてみると、それは非常に専門化、細分化されているといえないだろうか。したがって日本の英文学者は、それぞれの専門分野から、例えばCambridge大学英文学者の研究を捉えていることになるが、その把握は彼等の実体の一部分にすぎないということが多い。多くの日本の英文学者は、盲人が巨像にふれ、その「実体」を主張しているようなものではなかろうか。従って「定点観測」をすることにより、我々はCambridge English Schoolの伝統および彼等の考え方、生き方をまるごと捉え、それにより日本の英文学研究の単なる方法論のはやりすたりではない独特な研究・方法論に至る道を、換言すれば、日本人の独特の研究の発展に至る部分を、私ともども読者がさがさしていただければ、私にとっては有難いことである。取り上げる研究者は、Sir Arthur Quiller-Couch (1863—1944), Basil Willey (1897—1978), I. A. Richards (1893—1979), F. R. Leavis (1895—1978), C. S. Lewis (1898—1963), M. C. Bradbrook (1909—), Raymand Williams (1921—)で、彼等はCambridge English Schoolの創立以前から現在に至るそれぞれの時代を代表し、かつEnglish Schoolの伝統をそれぞれ独自のやり方で作り上げた人達である。その人達の人間と研究について考察したいが、その前にCambridge English Schoolの設立と特質を、歴史的な文脈で把握する必要があると思われる。

序章—The Cambridge English Schoolの設立まで

Cambridge English Schoolが正式に発足したのは1917年である。Cambridge大学の創立が13世紀初頭(1206年?)であるので、創立後実に700年という気の遠くなるような歳月を経てEnglish Schoolは誕生したことになる。英語学・英文学はイギリス人にとっては国語学・国文学であり、その研究と教育をつかさどる学科(又は学部)は特にイギリスにおいては重要と考えられるが、それがこの伝統を誇る大学にそれまで存在もしなかったことが不思議に思われる。その理由を知るには、単にCambridge大学にとどまらず、イギリスの大学において、どのように英語学・英文学が研究・教育されてきたかを知らねばならない。

古英語(Old English又はAnglo-Saxon語)の研究・教育についていうならば(Cambridge English Schoolは現在は近代英語—Modern English—が教育・研究の中心であり、古英語とは一線を画しているが)、それが始められたのは意外に早い時期—16世紀—である! Cambridge大学Copus Christi

CollegeのfellowであったMatthew Parker (1504—74) は、Anglo-Saxon語復興に強い関心を示し、彼の指導の下で、Cambridge大学でAnglo-Saxon語の教育が始められた。正式な古英語の教育はこれが最初である。即ち、Cambridge大学はイングランドで最初に古英語を教えた大学となったのである。その後ParkerはCanterbury大司教となり、*The Bishop's Bible*を刊行して当時の神学に多大の貢献をしたが、古英語関係でいえば、Gildas, Asser, Ælfric など古英語の著述家の作品の編集・出版に貢献をした。なかでも彼の顕著な業績は、Cambridge大学でイングランドで最初のAnglo-Saxon語の本を出版(1567年)したことである。即ち、Parkerの指示のもとにCambridge大学の印刷工John Dayが最初のAnglo-Saxon語の活字を作り、Parkerの秘書John Jasalynの編集の下にその本は出版されたのである。そしてParker大司教が所有していたAnglo-Saxon語著作の原稿(MSS)は、Cambridge大学のCorpus Christi College, Trinity CollegeおよびCambridge大学図書館(University Library)に移管されてきた。そのために、17世紀にあつては多くのAnglo-Saxon MSSがCambridge大学に集中していたといわれる。従つてCambridge大学 Trinity Collegeの卒業生 Sir Henry Spelmanが、Cambridge大学にAnglo-Saxon語の講師職を設けるために多大の努力をすることになったのは、自然の趨勢であつたといえよう。SpelmanはまずAnglo-Saxon語の文法と辞書の出版を急務と考えた。何年かの思案ののち、Canterbury大司教Usherの助言も得て、彼は1640年Cambridge大学のVice-Chancellorにその提案の草案まで準備していた。即ち、そのポストにつく者は、Anglo-Saxon語の講師とNorfolk州Middletonの副牧師(Vicar)を兼務し、一学年に二つの講義—Saxon語研究およびイングランド教会史—を講ずることであつた。翌年、不運にもSpelmanは死去したが、彼の努力は無駄ではなかつた。講師職は設けられ、初代講師に選任されたAbraham Whelocは、1643年にBedeの著作である*Ecclesiastical History* (原文ラテン語)のAnglo-Saxon法典を出版することになったからである。またWhelocの死後、Anglo-Saxon語講師となつたWilliam Somnerは*Dictionarium Anglo-Saxonico Latino Anglicum*を1659年に出版することができた。しかしSomnerはCambridge大学講師でありながら、彼が出版した辞典はCambridge大学ではなかつたことは注目しなければならない。というのは、古英語の研究・教育の中心は、王政復古(Restoration)後はOxford大学に移つたためである。当時のCanterbury大司教であつたLaudはAnglo-Saxon語研究を奨励し、貴重なAnglo-Saxon MSSをOxford大学Bodleian図書館に寄贈する趨勢になってきていた。そういうこともあつて、上記SomnerのAnglo-Saxon語辞典はOxford大学で出版されたのである。その後Anglo-Saxon語研究はOxford大学で盛んになってゆく。それは同大学Lincoln CollegeのfellowであつたThoman Marshallおよび彼の師であるFrancis Juniusにも負うところが多いといえよう。特にJuniusはAnglo-Saxon語の詩人Cadmonの著作やAnglo-Saxon語の福音書を出版し、Anglo-Saxon文学研究の進展に大いに貢献した。

このような古英語の編集・出版の進展に比べ、イギリスの大学における近代英語学・英文学のそれは遅れているといわなければならない。勿論、趣味で英文学を学ぶ人はいたが、大学での教育・研究はやはりClassics(ギリシア・ラテンの古典語・古典文学)とOriental literature(ヘブライ語、サンスクリット語の東洋文学)の研究が中心であり、時間、空間が近く、関心も高いはずの近代文学研究、特にイギリスのそれは大学の研究にふさわしいとの認識はなかつたといつてよい。少し下つて1708年に英文学、特に英詩批評と考えられるむきもあるProfessorship of PoetryがOxford大学にAll Soul's CollegeのHenry Birkheadの寄金で設けられたが、次の引用を参照していただきたい。

No doubt, as Professor Mackail says, it never occurred to Birkhead that his intended

Professor “could pass beyond the study of the poets then recognized as classic, and the detailed application of the rules laid down, as was thought, by Aristotle, and commented on by Horace and Scaliger.”²

従って詩学教授の仕事は古代ギリシア・ローマの詩人の研究であり、彼等の文学批評とはアリストテレスなどの批評の研究およびその適用であったわけである。その初代教授Joseph Trappは彼の講義を“a compendium of the received doctorines of the orthodox classical school”³に限定し、主に古代ローマの詩人を講じたことからこのことは了解される。彼は時折英国の詩人についての言及もしているが、“(He) hardly contemplated English Poetry, either as a great literature, or as a living art.”⁴であった。しかし7代目になると事情は少し変わってくる。第7代詩学教授Thomas Wartonは、英詩は本格的批評・研究の対象としてふさわしいと主張することになるからである。彼はラテン語で講義をしたが、英語で書いた彼の著書*History of English Poetry*（第一巻出版は1774年）は、史実の不正確さという欠点にもかかわらず、英文学の研究に大いなる役割をはたした。しかしその後の詩学教授が英詩を研究・教育の真剣な対象と見做すようになったかというところではない。19世紀初頭詩学教授に就任したJohn Kebleは、古典文学の批評を相変わらず重視したのである。結局、このchairは後にOxford大学に設立されるEnglish Schoolとは直接的な繋りがないといわざるをえない。

Oxford大学ばかりでなく、Cambridge大学でも英文学の研究は既述したように進展はしなかったが、近代英語・英文学を研究・教育の対象として取り上げた大学がある⁵それはスコットランドのEdinburgh大学であった。というのは、スコットランドにおいてはイングランドはいわば外国であり、彼等は英文学を外国文学を学ぶように学んだ。いわばイングランドのOxford大学およびCambridge大学にとっての古典語・古典文学が、スコットランドのEdinburgh大学にとっての英語学・英文学となりえたわけである。このために、18世紀においてラテン語がEdinburgh大学の講義から脱落して、英語がこの欠落を埋めるに至った。この時期に「英文学教育の父」“Father of Lit. Ang. lecturing”⁶といわれる人がいる。Edinburgh大学のDr. Hugh Blairで、彼はもともと緻密な修辞を用いた説教で有名であった。その修辞を英文学を引用して説明したわけであるが、これは興味深いといわねばならない。というのは、修辞はもともとClassicsからの引用で説明されるのが慣例であったが、Blairは英文学に対する強い関心を持っていたため、Classicsでなく、英文学の諸作品で説明した。その後（1762年）Dr. BlairはEdinburgh大学の修辞学・純文学担当欽定講座教授（Regius Professor of Rhetoric and Belles Lettres）に任命される。とにかくこのようにして説教（sermon）や修辞（rhetoric）に付随して大学における英文学教育が始まった。このことについて「英語教育報告書」（*Report on the Teaching of English*, p.243）は次のように記述している。

It is noteworthy that except for this part-time Oxford Chair [of Poetry, which doesn't count because it has no connection with any Faculty and because English Poets were barely mentioned] the academic teaching of English began in Scotland.⁷

Dr. Blairの死後、修辞学・純文学（又は英文学）教授のポストは長い間補充されないままになる。しかし同じスコットランドで英文学の教育に精魂を傾けた人がいる。それはAberdeen大学論理学教授Bainである。Aberdeen大学の論理学教授の職務の一つは、文法・修辞法に則った英語文章構

成学 (English Composition) についての講義であった。彼は自らその講義のために本を著わし、それを講義のテキストとして使用し、英文学の作品からの引用で英語文章構成学の講義を進めていった。注目すべきは、Blair教授にとってもBain教授にとっても、英文学の講義は修辞学又は論理学の講義に付随しているもの、あるいは後者を主とし前者を従の関係とするものであった。ともかくBlair教授を「英文学教育の父」とするなら、Bain教授は英文学に生気を与え、それを永続的な学問とした人であり、彼の教え子の言によれば、

[He has been] opening up a new world to us who know classics only. . . the mysteries of style. . . Poetry as a Fine Art. . . and then at our debating society sending us into discussions of Dryden, Pope and Tennyson.⁸

とあってよい。

スコットランドには他にも英文学を尊重するGlasgow Universityがあった。その大学は、人文学の教授がShakespeareについての有名なエッセイを書いたり、論理学の講師が英文学を講じるという英文学重視の大学であり、1850年にはM. A.の試験科目に英文学も加えるというイングランドの古い大学に比して極めて進歩的であった。そのGlasgow大学の英文学教授に1862年John Nicholが任命された。彼は英文学重視の伝統を受け継ぎ発展させた。その結果彼の後継者は、後にOxford大学詩学教授となるA. C. Bradleyや、のちOxford大学初代英文学教授となるSir Walter Raleighを迎えることになり、Glasgow大学の英文学重視の風潮は一段と強まったとあってよい。

一方Edinburgh大学ではBlair教授のあと長い間修辞学・純文学教授は不在であったが、William Aytounが1846年にそのポストを受け継ぐこととなった。彼は翻訳 (Goetheの翻訳等) の仕事もし、また*Lays of the Scottish Cavaliers*や*Firmilian*などの詩集を書いたRomantic Revivalの最後の詩人である。そのAytounの後任教授はDavid Massonで、彼はEdinburgh大学で神学を学び、のち英文学を修めやがてLondon大学University Collegeの英文学教授 (1853-65) を勤めていたが、転じてEdinburgh大学修辞学・英文学教授となり、そのポストを30年間勤めた人である。Massonは「英文学研究創始者」「Lit. Ang. inaugurator」⁹と考えられており、彼はこれまでのように作家の文体ではなく、作家の人となりを論じ、文学を人間性が表現されているものとして捉えた。ここに至ってようやく、英文学は修辞学や論理学に付随するものでなく、またその観点から論ぜられるのでもなく、作家の存在が認識され、その個性を研究する学問となった。そういう意味で英文学はまことに人文学となりえたといえる。教授就任講義の努力目標として彼が意図しているように、

It will be my effort to give to our studies of English Literature that connectedness, that systematised form, which befits an academic, as distinct from a merely popular course.¹⁰

と、英文学が“academic”なものとして認識され始めたといえる。

Edinburgh大学修辞学・英文学教授のMassonの後任はGeorge Saintsburyである。彼は前任者Blair, Aytoun, Masson等と異なり、スコットランド出身ではなく、イングランド出身であった。独立心の旺盛なスコットランドのEdinburgh大学にあって、彼の講義に対する妨害、いやがらせがあったようだが、結局彼は1895年から1915年までそのポストを勤め上げ、“a new champion, a king, an emperor”¹¹といわれるまでとなった。この時代にあつては当然のことながら、彼は大学 (Oxford大学) でもと

もと英文学を学んだのではなく、古典文学を学んだ人である。彼は前任者のMassonの力説した作家の意図などには関心を示さず、文体等を重んじる修辞学の伝統に帰った。

19世紀のその時代にあつては、英文学研究はいわば“gold-rush days”¹²の熱気があつたといえよう。英文学の古典といわれるものにまだ誰も手をつけていなかったわけで、Saintsburyは注釈と序文をつけて、次々とSwift, Fielding, Smolett, Austen等の作品を出版していった。また英文学にとどまらずフランス文学、イタリア文学、スペイン文学に対しても研究を推し進め、次々と研究書を出版した。そういう彼の超人的学殖とエネルギーは目を見張るものがあるといえよう。しかし彼には無論欠点というものもあつた。彼は何を論じてもそこに彼の個性を感じさせず、その意味で“one of the most intangible writers that ever lived.”¹³である。

一方、スコットランドの大学に遅れること約1世紀、イングランドにおいても英語学・英文学の研究・教育を取り上げた大学がある。それはLondon大学である。しかし19世紀のLondon大学とEdinburgh大学はその学問的雰囲気著しく異なっていた。Edinburgh大学等のスコットランドの大学はその歴史も古く、スコットランド人気質からいっても、Oxbridgeに対する挑戦的態度が歴然と見られたが、一方London大学は当時まだ新制大学であり、Oxbridgeに対して“juniority”を意識せざるを得なかった。その結果、“London University was chiefly useful as a short cut to a degree.”¹⁴となった。その間の事情を次に述べてみよう。

London大学の母体としては、1826年に創立されたUniversity Collegeと1829年に創立されたKing's Collegeがあり、両カレッジが総合して、1836年にLondon Universityが創立されたのである。しかし教授陣が整えられる以前から一例えばKing's Collegeには当初は専任の英語教師がいなかった—London大学は他の大学に比して英語を重視した。その結果、1839年にはEnglish paperが入学試験(matriculation examination)に初めて採用されることとなった。その事情は当時の“University Calender”に次のように書かれている。

One innovation in the traditional practice of Universities in awarding degrees in the Faculty of Arts was adopted from the first in the Matriculation Examination by the recognition of the English language as a necessary branch of study in addition to Latin and Greek.¹⁵

ラテン語やギリシア語とともに英語(English Language)がこのように決定されたのである。1840年には、Shakespeare, Addison, Warburton, Swift等についての英文学の問題が出題されるようになり、古典学の文学修士の試験(the M. A. Classics examination)にEnglish Essayが課せられることにもなった。ついに1859年には、B. A. courseの普通学位(Pass Degree)および優等卒業学位(Honours Degree)の卒業試験の中に、英語学・英文学が独自に組み込まれることとなった。入学試験にも卒業試験にも英語がこのように組み込まれた意義は大きいといわなければならない。ここでLondon English School(London大学英文学科)が正式に発足したと考えてよからう。しかし、ラテン語の代用として文化の言語としての英語を受容したスコットランドの大学と異なり、London大学英文学科は(人気ある学科に成長してゆくが)人文学的教養という視点が欠如していた。Stephen Potterによれば、

It came out of Utilitarianism, out of practicality and common sense. It aimed at

providing useful, vocational education. This, curiously enough, is how Our Subject came in : for English Language and Literature can easily be made to seem the least non-vocational of all the liberal schools. English is obviously useful : understanding it and writing it is useful, in a much more direct way than are the Classics. English Literature, or at any rate Lit. Ang., might be said to be the typical 'Arts' subject of Utilitarianism.¹⁶

となる。

19世紀には、London大学につづいて英文学を教える大学が現われた。Durham, Manchester, Leedsの大学である。どれも個性ある大学に発展してゆくが、当初はLondon大学の機構を模倣してスタートしたといえよう。

スコットランドの大学ばかりでなく、London大学や他の新制大学においても、このように英語が教えられるようになったが、OxfordやCambridge大学の状況はどうであろうか。まず、Oxford大学における英語学・英文学研究の進展を見てみたい¹⁷。Oxfordにおいて、近代英語の研究・教育は、同大学の詩学教授との関係より、他の近代語 (Modern Languages) の研究・教育と密接な関係をもって発展してゆく。両者は互いに牽制し、発展を阻害し合うこともなかったわけではないが、それらは教育・研究体制が同じ組織に属するため、多くの場合は共同歩調をとったり、互いを発展させることになったのである。

その近代語の教育がOxford大学で初めて試みられるのは、18世紀になってである。1724年にGeorge IがOxford大学にModern Historyの教授職を設けたのがその教育のきっかけである。その近代史教授は年俸£400の給与から、王が選定した20名の学生に近代語を教える二人の教師を雇傭するわけである。その目的は高級官僚および外交官養成であり、学生はフランス語、ドイツ語又はイタリア語を書き、話す能力を身につけることになる。学問的目的というより実目的がこのように優先された。しかし官僚体制の不備という卒業生の就職先の問題もあり、また古典語・古典文学を重視するOxfordにあって、近代語が生涯かけて教育・研究するに価するものかという疑問も出されて、近代語教育は遅々として発展をみななかった。そのため1788年に死去した建築家Sir Robert Taylorの遺言によるOxford大学附属近代語研究所の設立も、長い間放置されたままであった。19世紀になってようやくTaylorの遺言が実行されることになり、近代語研究所Taylorian Institutionの建物が1841~45年に建築された。その研究所の目標は、大学の教育体制の中に、換言すれば試験制度の中に、近代語を優等生資格試験を持つHonours Schoolとして正式に認定させることである。それには大学の構成員の大半が、近代語は真に教え、学ぶ価値があることを認定することが不可決である。変化は徐々にみられ、大学人の間に近代語に対する関心が高まるようになってきた。なぜならTaylorian Institutionは近代語に関心ある少数の学生を教育するばかりでなく、多くの大学構成員を対象とした講演等を開催して、近代語に対する啓蒙にこれ努めたからである。またTaylorian Institutionは近代語に関心のある研究者のまとりの場所としての役割をはたし、その附属図書室は彼等に資料も提供したからであろう。その背後で、Oxford大学出版局Clarendon Pressが近代語の講義録、辞典等を出版し、大学人の注意等を喚起し、近代語教育・研究の進展に多大の貢献をした。その出版には歴史的大事業である*New English Dictionary* (N. E. D. 後に O. E. D と略称される) やDr. Wrightの*Dialect Dictionary*が含まれている。そして

It is sufficient to point out that the scientific study of one modern language strengthened

the claims of others to similar recognition, and that there was throughout a working alliance between the group who studied English and the groups who studied other European tongues.¹⁸

と、Sir Charles Firthの指摘にあるように、英語と他の近代語には一層強い連帯感が生まれるようになった。

1873年にOxford大学で、近代語の中では最初に英語のPass Examinationが認定された。これは普通学位 (Pass Degree) を取るための試験で、優等生学位 (Honours Degree) ではないが、ともかく試験制度の一角に認められた意義は大としなければならない。それから“a School of Modern Literature in which English, German, French and other languages should all be comprehended, a School of the same nature as the History School or the Law School, in which candidates might be permitted to take their degree.”¹⁹という、英語及び近代諸言語を含む近代文学のHonours Schoolが検討された。また英文学を英国史学科に取り入れるという代案も提案されたが、結局、Mr. Godwin Smith (Oxford大学近代史家) の“English Literature ‘can only properly be studied historically,’ but it should be represented by a separate chair, not ‘connected with the department of Modern History.’”²⁰という歴史学科の案が有力となる。

学内の委員会 (The University Commission) でなされた種々の検討の結果、英語単独のHonours School設立に有効な働きをすることが予想されるMerton Professorship of English Languages and Literatureが、1885年に設立の運びとなる。その教授職の設立がSchool設立と同時に後ではなく、それ以前であるということは注目されねばならない。この頃になると、大学の内部ばかりでなく外部でも、新聞・雑誌等を通じてOxford大学に英文学科を設立する積極的な働きがなされた。大学内外の認識が格段に高まったというべきである。しかし英語単独のHonours Schoolという提案には一挙にならず、近代語をまとめた形の提案に落ちつく。即ち、1887年にOxford大学教職員会 (Congregation) ²¹に、School of Modern European Languages設立は正式に提案され、その規則の前文 (Preamble) に対して、過半数の賛成が得られた。その案は、六つの近代語 (英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語、ケルト語) の試験を具体化したものである。学生は特定の一つの言語を深く学び、それに関連する言語の一般的知識を修得し、加えて特定の言語の歴史及びその文学を理解することとなった。即ち、文学とは語学に均等のウエイトがおかれたというべきであろう。結着したかにみえたこの案には強い反対意見がその後出された。The Waynflete Professor of Moral Philosophyは、

We are going to institute a baseless study of the many sided writings of our own country from one side only, without connecting it either with the classics, which gave the English mind a new birth at the Renaissance, or with the history of the country of the writers themselves.²²

と述べ、Classicsや自国の歴史と結びつかない英文学研究は“baseless”と、その提案の可決に強い調子で反対した。続いて彼はその提案が可決されるならば、“An English School will grow up, nourishing our language not from the humanity of the Greeks and Romans, but from the savagery of the Goths and the Anglo-Saxons. We are about to reverse the Renaissance.”²³と、近代英語と古英

語が結びつくことに対して危惧の念を表明した。

また大学の外部にあって反対した人もいる。Oxford大学卒業生である英文学者Churton Collinsがその一人であるが、彼の主張は次の二つから成り立っている。その一つは、その案では文学が語学に従属するという彼の危惧の念の表明であり、もう一つは歴史の連続性 (continuity of History) より文学の連続性 (continuity of Literature) が大切であり、その意味で英文学は古典文学 (Classics) により多くの影響を受けているという彼の主張である。

Oxford大学の欽定近代史講座担任教授 (Regius Professor of Modern History) E. A. Freemanは、大学教職員会でなされた提案に賛成していたのだが、文学は教えることも試験することもできないと主張し始め、続けて *The Contemporary Review* (XII (1887), 566) 誌上で、

The crammer can but teach facts ; the crammer in literature will have to fall back on the facts of literature, and those facts are, in practice, sure to be very largely nothing better than the gossip, the chatter about literature, which is largely taking the place of literature.²⁴

と、述べるようになった。

Oxford大学は内外のこれらの意見を参考にして、修正案を1887年に教職員会 (Congregation) に再提案したが、賛否同数のため、結局この提案は可決されなかった。その後、英語を他の近代語から分離する考えが生まれ、

An adequate scheme for a Modern Language School would, no doubt, include the study of all languages mentioned in the defeated Statute. But what the nation most pressingly feels is the need of a School of the English Language and Literature.... The country asks for light ; we can give light, but we refuse it. . . .²⁵

というラテン語教授の意見に代表されるものとなる。英文学科の設立に重心が移行したといえる。

また大学外においても、英語の教育・研究の重要性が認められはじめた。Public Schoolで英語が重要視され始め、またGovernment ExaminationやLocal Examinationで英語が試験科目に取り入れられたのである。従ってこの要求に答えるべく大学で英語教師を養成することが急務となった。こういう状況を背景に1894年には、School of English Language and LiteratureのHonours Schoolのための提案がOxford大学教職員会で討議された。今回は評議会 (The Hebdomadal Council—評議会の週会) も積極的に賛成の意向で動き、二つの修正条項を付け加えて、教職員会を無事通過させた。これは評議会 (Convocation)²⁶でも可決された。その結果、English School設立委員会 (Board of Studies for the English School) が組織されて、試験、カリキュラムの詳細にわたる規則が制定された。その委員会で、英文学と英語学の比重の置き方をめぐって論争がなされたが、どちらの側もゆずる気配はなかったため、この論争を和解させる試みがなされ、両者の中間をとった形で、Honours Schoolの受講生は、それぞれのテーマのpaperを均等数だけ書く (4 ½ papers on Language, 4 ½ papers on Literature) という事で決着をみて、その案は1894年に評議会を通過した。かくして、Oxford大学にSchool of English Language and Literature (The Oxford English Schoolという) が生まれた。なお、これまで往々にして協調の路線をとってきた英語以外の近代語学科は、それに

遅れること8年、School of Medieval and Modern Languagesとして、1903年にHonours Schoolとして正式にスタートすることになった。かくして、Oxford大学における英語及び他の近代語は、それぞれ長年待望していたHonours Schoolを持つことになり、これを契機に英語学及び英文学の教育・研究は格段の発展をとげることとなった。

次にCambridge大学英文学科について論突したい。Classics重視のOxford大学と、ClassicsとMathematicsをともに重視するCambridge大学は、それぞれ共通点・類似点とともに独自の性格をもち、独自の発展もしてきた。従ってEnglish Schoolの成立とその後の発展についても、同じことがいえるということ予測しておかねばならない。

そのCambridge大学英文学科(The Cambridge English School)は、Oxford大学のそれより20年以上も遅れて、1917年に正式に発足した。Cambridge大学でEnglish Tripos²⁷(英語科優等卒業試験)が成立した年でもあるが、TriposのないEnglish Schoolはありえないということにもなる。正確に言えば、English Triposが正式にCambridge大学評議会(Senate²⁸)で認定されることは、Honours SchoolであるCambridge English Schoolも正式に認定されるということである。Oxford大学においてHonours Courseの試験制度が認定されて、Oxford English Schoolが正式にスタートしたのと同じである。Cambridge大学においては、English Triposは重要な試験制度であるばかりでなく、教師達の教育・研究体制の重要な反映でもある。このTriposが大学の総意で正式決定されるまでに、きびしい真剣な議論が各段階でなされてきた。新しい学問であるEnglishの学問としての十分な内容はどうか、その理念や体系はどうか等をめぐってきびしい本質的議論が展開される。その際Englishは、緻密で深遠な学問体系を誇るClassicsやMathematicsと比較され、また他の学科による評価決定もなされてきたわけである。設置すべき学科の存在理由についての長年月にわたる本質的討議なくして、主に財政上の基盤に依存して新学科の設立をみるというのでは決してない。そういう意味でCambridge English Schoolにとって重大な意味をもったKing Edward VII Professor of English Literatureの基金寄贈に際しての反対意見

It seemed to him (the Senate Dr. M. E. M'Taggard) that a professorship of such a subject, and to be filled in such a manner, would not only be useless but positively harmful to the University.²⁹

は、考察に価するといえよう。英文学教授のポストが「無益である」ばかりでなく、大学にとって「有害である」との認識まで出てくることは、教授というポストばかりでなく、英文学そのものの学問としての内在的価値についての強い疑問であると考えざるをえない。そういう中で英文学科が除々に市民権を獲得してゆかねばならなかった。その経緯をE.M.W. Tillyardの*The Muse Unchained* (1958)を参考にしながら種々の考察を試みたい³⁰

1917年のCambridge English Schoolの設立までには気の遠くなるような歳月が必要であった。歴史の古い大学だけにその感が一層強い。Cambridge English Schoolの最初の萌芽は、歴史をたどれば、既述したようにAnglo-Saxon語の本がCambridge大学で出版された1567年といえようが、School設立に具体的な形で関連するものを探せば、Cambridge大学評議会(The Cambridge Senate)が正式決定(grace)して、1817年に設立させた「近代・中世語研究特別委員会」(Board for the supervision of the Study of modern and medieval languages in the University—以後「特別委員会」と略称)といえよう。この委員会は、近代史、ラテン語、アングロ・サクソン語の各教授及び

評議員の4人のメンバーからなり、その委員会の職務は中世語・近代語（ここでは近代語に焦点をあてて考察する）の教育・研究についての提案をすることである。この時期に、独自の学科として英語が認定されることは考えられず、英語は他の近代語（フランス語、ドイツ語等）とともにまとめて評議会の注意をひいたにすぎない。この委員会のメンバーの一人に、Anglo-Saxon語の教授が加えられたが、この委員会設立を期してそれまで存在しなかったAnglo-Saxon語教授職が設けられたということでもあるから、その委員会設立の意義は大きいといわねばならない。その初代教授にW. W. Skeatが選ばれた。

SkeatはCambridge大学でもともと数学を専攻した学生であったが、後に神学に関心をもち聖職者となる。しかし聖職者に不相当であることを知り、彼は母校Cambridge大学Christ's Collegeで数学教師に転じる。しかし英文学者である友人E. J. Furnivallの勧めもあって、SkeatはAnglo-Saxon語研究に打ち込み、古英語のテキストの編集や註釈に大きな業績を残し、高名な学者になってゆく。そのSkeatが後に設立されるCambridge English Schoolに貢献したことはいうまでもない。現在、Anglo-SaxonとEnglishは別な学部にも所属しているが、この頃はともに同じ組織に所属していた。従って、Anglo-Saxon語の教授は、英文学教授職設立前では、English School設立に最も深く関与したのは当然といえる。事実、Skeatは「特別委員会」で重要な働きをした。その結果、1881-82学年にその委員会は大学副総長（Vice-Chancellor³¹）に、近代語の普通学位特別試験（Special Examination for Ordinary Degree）制定を答申したのである。なお、この普通学位特別試験はTriposより劣った試験制度で、Oxford大学のPass Examinationに相当すると考えてよからう。

特別試験とTriposについてはさらに説明する必要がある。19世紀中葉までCambridge大学にはClassicsとMathematicsの二つのTriposしか存在せず、しかもこの二つはCambridge大学の学問の中核として君臨してきた。その後諸科学の発展とともに、Moral Science, Natural Science, Theology, Law, HistoryがTriposとして次々に認められてきた。しかしTripos（優等生試験）に合格すれば“with Honours”と優等卒業学位が与えられるのとは別に、それより劣った「普通学位」（Ordinary Degree）の「特別試験」（Special Examination）がある。伝統あるClassicsやMathematicsはTriposと同時に特別試験も持っているが、Englishは普通学位の特別試験だけを持つに至ったわけである。その特別試験について詳述すれば、それはそれぞれLanguage and Literatureという名称を持った三つの部門—英語、フランス語、ドイツ語の部門—から成立している。英語部門のシラバスは次の通りである。

- (a) Explanation and discussion of passages from selected English books, one of them before 1500
- (b) Grammar, etymology and history of the English Language
- (c) Selected Period
- (d) Composition³²

このシラバスは語学的色彩濃厚というべきであろうか。しかし「特別委員会」はこの答申に引き継いで、1883年3月にはThe Modern Languages Triposの制定を答申し、評議会で少しの修正のち可決させた。英語は、曲りなりにも、他の近代語とともにTriposを持つことができたといえよう。そのModern Languages Triposでは、フランス語並びにドイツ語の翻訳と作文は必修科目であり、他の三つの科目から一科目は選択であった。選択科目はセットになった次の三種類—プロバンス語、

イタリア語並びにフランス語；アングロ・サクソン語，ゴート語並びにドイツ語；アングロ・サクソン語，ゴート語並びに英語一である。英語を志望する学生といえども，フランス語及びドイツ語を必修科目として修得し，かつアングロ・サクソン語，ゴート語も修得しなければならない。しかも彼等が学ぶ英語は17世紀末までの英文学作品であり，やはり主力は古英語及び中英語がしめ，全体的に見ても，文法的・語学的色彩が濃厚であった。

このTriposは，1886年から1893年までの8年間続くことになるが，概して不評であった。そのため1890—91学年に「特別委員会」はフランス語，ドイツ語の翻訳・作文の必修科目の廃止などの答申をする。これに対して文学批評，文学理論こそがこの答申に欠落しているという意見があり，その意見の代表者はCambridge大学Selwyn Collegeの学長Arthur Lyttletonであった。これに対してSkeat教授はCambridge大学*University Reporter*に次のような反論を寄せている。

Literary criticism was not specially mentioned because it was necessary all the way through. It was included in literary history in nearly all the papers. As a matter of training, literary history should precede literary criticism. Men who merely reproduced things out of books would do better to learn literary history before attempting to formulate ideas and opinions.³³

Skeat教授のこの考えと文学批評が重要な位置をしめ，それ独自のペーパーがある現在のCambridge大学英文科のシラバスとは驚くべき対照をなしているといわざるをえない。のちに「特別委員会」はModern Languages Triposに関して修正案を提出したが，それはLyttletonの主張とはかけ離れて，語学的特色が濃厚なものであり，またShakespeare以降の文学を殆んど無視していた。修正案はSkeat教授の上記の主張に沿ったものといってよかろう。しかしこの修正に反対する者は他にもあらわれた。Oxford大学出身の文学批評家J. Churton Collinsである。彼は*Study of English Literature*を著わし，その著書の中で“Literature must be rescued from its present degrading vassalage to Philology.”³⁴と主張した。また彼はModern Languages Triposの英語コースを選択する学生数は少ないと指摘し，かつ英文学に与える影響はゲルマン的要素より古代ギリシア・ローマの古典文学のほうが大であること，また古典文学の背景のないHonours Course in Englishは不相当であるという主張もした。彼の主張は「特別委員会」答申に直ちに反映されたわけではなかったが，1917年のEnglish Tripos成立の時，大きく取り入れられた。

「特別委員会」はModern Languages Triposについての修正案を1900年評議会に提示し，なんの反対もなく可決させた。これは大胆な提案ではなかったが，英語学・英文学研究の近代化に役立ったといえよう。そこでは1500年以降（1832年に至る）の英文学も存在価値が認められ，学生もそのpaperを書くことができた。同じく，Triposについてのさまざまな修正提案が1909年になされた。それまで英語のsectionには，Section A（中世及び近代英語—ChaucerとShakespeareが中心）及びSection B（古英語）があり，学生は必修科目としてA，B両sectionを取得しなければならなかったが（全体として語学3，文学1の割合），より専門化され近代に比重をおいたA2 Sectionが提案されたのである。その提案では従来のA，B両Section取得という組合せの他に，A又はBの一科目とA2という別な組合せ（文学色が強く出ている）も可能となり，それはやや近代的，進歩的案というべきであろう。というのはこの時期には，Manchester, Liverpool, Leeds, Sheffieldなどの諸大学では，文学批評のpaperが認められていたため，Cambridge大学英語の後進性がとかくいわれ，「特別

委員会」は新制大学の動向を十分検討して提案したものであった。

この提案をめぐる、Cambridge大学評議会の意見は激しく対立した。反対意見の主だったものは、ドイツ語講師Quiggin及びギリシア語教授Jacksonの二人である。Quigginは、A2設立により英語は高度に専門化され、Honours Degree適格の広い知見を持った学生の養成はできなくなるという意見を述べ、Jacksonは、イギリス文学が学問の対象として貧弱なものであるという反対意見を開陳した。このJacksonの意見は、単にA2設立という問題にとどまらず、一般的にEnglish Studiesに対して、Cambridge大学、特にClassicsの教員層に根強く残っている意見というべきであろう。やむなく「特別委員会」は再提案しなければならなかった。それは前回の提案を部分的に変更したものであるが、変えた点は思い切ったものであった。即ち、新しいsectionについては前回の提案通りだが、それはdegree取得にはカウントしないということである。結局、それは真に文学好きの学生を引きつけようが、大半の学生には魅力がないものとなってしまった。

Modern Languages Triposをめぐる種々の修正案・規則改定について論述してきたが、次にCambridge Englishにとって大きな出来事について論述しなければならない。その一つは、大きな存在であったElrington and Bosworth Professor of Anglo-SaxonのW. W. Skeatの死去である。Skeatは古英語・中英語の碩学であり、手堅く古書の原稿や言語的資料を収集し、検討を加える言語学者であり、English Studiesの安易な近代化・文学批評へ傾く方向を押し止める存在ではなかっただろうか。だからこそ、彼の後任の選出はCambridge Englishにとって大きな意味を持っていたといえよう。後任教授にはH. M. Chadwickが選出された。彼はCambridge大学でClassicsを学び、のちに転じてAnglo-Saxon語の専門家となった碩学である。しかし彼は多岐にわたる関心を持ち、ヨーロッパ諸国の文学にも精通していた。彼は文学にしる人物にしる壮大なものに関心を示し、ギリシア文学の骨太な厳格・峻厳さを称讃する一方、イギリス中世寓話の「あわにも似た特質」(“Gothic frothiness”)³⁵を侮辱した。そのためその時代の文学の傑作といわれる*Pearl*を「まことに下らない作品」(“bloody nonsense”)³⁶と考えた次第である。必ずしも専門分野を偏愛しないことが彼の思考の特質であり、これがためSkeat教授の軌道を彼は大きく修正することになった。

このように広い識見を持った彼が、教育にしめる重要な学問はやはりClassicsだと考えていた。勿論、Classicsを重要視する人達はCambridge, Oxfordにも多くいたが、Chadwickは高等教育におけるClassicsを英語と結びつけ、新しく位置づけたところに独自性があった。Classicsの著作には多くの秀れた作品があるが、それらを理解するには、古代ギリシア語・ラテン語という大きな障壁があるため、それを打ち破る手段は英語の翻訳でそれらの作品を読むことであり、そうすれば学生には得るところ大であり、近代英語が重視されるゆえんはそこにある—そう彼は考えていた。彼が高等教育にしめる近代英語の位置を、重視していた古典学より高く評価した理由もここにある。Anglo-Saxon語の教授がこのように進んだ意見を持ち、果敢に行政手腕を発揮し、かつ若き英語専門のMansfield ForbesやE. M. W. Tillyardの協力を得たからこそ、今日の進歩的なCambridge English Schoolの礎が築かれたといつてよい。

もう一つの大きな出来事は、1910年11月にSir Harold Harmsworthが英文学欽定講座担任教授(a chair of English Literature in memory of King Edward VII)の基金をCambridge大学に寄せたことである。English Tripos成立まで実質的に采配を振ったのは後に任命された英文学欽定講座担任教授ではなく、Anglo-Saxon語の教授であったけれども、これは英文学教授となったQuiller-Couchの実務を避ける個人的な性格によるものである。現在のCambridge大学では、Anglo-SaxonとEnglishはそれぞれ別な学部を構成しており、Cambridge English Schoolの中核は、組織においても実質

的にも、英文学欽定講座担任教授であるといえよう。そういうことであるから、このHarmsworthの申し出はCambridge English Schoolにとってまことに大きな意味を持つことになった。またその教授職の条件の意義も考察すべきであろう。次の通りである。

It shall be the duty of the Professor to deliver courses of lectures on English Literature from the age of Chaucer onwards, and otherwise to promote, so far as may be in his power, the study in the University of the subject of English Literature. The Professor shall treat this subject on literary and critical rather than on philological and linguistic lines.³⁷

即ち、英文学欽定教授の条件は、Chaucer以降の英文学を講じること及び語学的でなく、文学的・批評的に学問にアプローチする者ということである。この条件は、Cambridge English Schoolの方向を大きく決定づけるものであったといつてよい。その基金が寄せられた翌1911年に、その教授職が正式に決定され、Trinity CollegeのA. W. Verrallが初代Edward VII Professorとして任命された。彼は古代ギリシア・ラテン語を専門とし、それ以外にJohn Dryden研究や近代英文学作家についてのエッセイ集を出版していることもあり、英文学の造詣も深いといえたが、病弱であったため、任命の翌年死去した。後任としてSir Arthur Quiller-Couchが任命された。そのQuiller-Couchについては次章でくわしく論じることになろう。

このように加速度的にCambridge Englishは文学色を濃厚にしはじめたが、それに反対する者も当然予想できた。UniversityでもCollegeの講師でもない“free lancer”のA. J. Wyatt及び3人の女性教師(dons for supervision)であるMiss Steele Smith, Miss Anna Puaes(ともにNewnham College)及びMiss Hilda Murray (Girton College)である。彼女達はみな語学の専門家であり、同じ専門のWyattとともにこの新しい動向に反対したが、文学への傾斜は押えようがなかったといつてよい。そういう教師達の専門を生かした無難な教室づくりというより、Cambridge大学にふさわしいEnglish Studiesの理想論が優先し、かつ実現を図るかなり大胆な教室づくりに向かってゆくのである。その際期待されていたQuiller-Couch教授は規則制定等の仕事にまるで関心を示さず、その結果Chadwick教授にその仕事が回ることになるが、E. M. W. Tillyardも記述しているように

If Q had opposed Chadwick, it would have been the end. But that was not at all the case, for with Chadwick's expansive ideas about the academic study of English Q was in complete harmony.³⁸

であった。即ち、Quiller-Couchは期待された役割こそ果さなかったが、Chadwickに反対しなかった。なぜなら、Chadwickの方向こそ彼の目ざす方向であるから、Chadwickに任せることは、彼が雑事に煩わされることなく、研究と趣味にゆったりと埋没できるからである。

このようにCambridge Englishにとって、二つの大きな出来事を境に、English Tripos成立の期待が高まり、Chadwick教授の強力な指導性もあって、その実現が近いと思われていた。早期成立を促した他の要因もあった。即ち、公務員採用試験にEnglish papersが課されたことである。ついに1916年に「特別委員会」はEnglish Triposの大改革を評議会に答申し、翌1917年に二つのセクション(A：近代と中世、B：古代)から成り立つ英語独自のEnglish Triposが成立する。かくしてCambridge

English Schoolは正式に成立した。Cambridge大学が創立されて約700年という気の遠くなるような歳月が英文学科設立までに必要であった。English Triposのシラバスは次の通りである。

Section A (English Literature : Modern and Medieval)

Containing six papers of three hours each.

1. Questions and essays on the general history of English Literature since 1603.
2. Passages from specified and unspecified works of Shakespeare for explanation and discussion; with questions on language, metre, literary history, and literary criticism.
- 3 a. Questions on a prescribed period of English Literature.
or
- 3 b. The history of the English language
4. Questions on English literature, life and thought from 1350 to 1603.
- 5 a. Questions on a special subject in the general history of literature, ancient and modern, in connexion and comparison with English Literature.
or
- 5 b. Passages from specified Anglo-Saxon and early Norse works (the latter being optional) for translation and explanation; with questions on literary history and subject matter.
- 6 a. Questions on the life, literature, and thought of England from 1066 to 1350; with passages from specified English and French works for translation and explanation.
or
- 6 b. Questions on the general history of literary criticism with special reference to English Literature.

Section B (Early Literature and History)

Containing five papers of three hours each to be chosen from:

1. Anglo-Saxon and early Norse=paper 5b in Section A.
2. English history, life, and literature before 1066.
3. Specified subjects in early Norse literature, thought, life and history.
4. The early history, life and literature of the Teutonic peoples.
5. The early history and antiquities of Britain.
6. The early history, life and literature of the Celtic peoples.
7. The Teutonic Languages, with special reference to Gothic, Anglo-Saxon, early Norse and Old High German.
8. The Celtic Languages, with special reference to early Welsh and early Irish.³⁹

このEnglish Triposにより、古い学問体系は一挙に近代的・進歩的なものへと跳躍していった。Tillyardによれば、その特色は四つある⁴⁰。一つは語学の必修を全廃したこと、二つは語学の代わりに文化・文明史を導入し、古代研究 (early studies) のオリエンテーションを設けたこと、三つは「中

世」が占める割合を極めて少なくしたこと、四つは近代英文学研究を古代英語から遠ざけ、それをヨーロッパ大陸、特に古代ギリシア・ローマ研究と深く関連づけたことである。

ここで注意しなければいけないことは、新しいEnglish Triposは、画期的といえるほど英文学色濃厚となったが、それはEnglish Literature Triposではなく、実質的にもEnglish Triposであることである。“... it [the Tripos] promoted the study of literature not only as such but in its historical and social setting.”⁴¹である。こういうCambridgeの新しい試みは大学外でも大きな議論をよんだようである。Anglo-Saxon語必修の廃止並びに中英語の全廃は、創立まもないイギリス英文学会 (English Association) からも反対された。それほど革新的なTriposであったというべきであろう。

久しく待望されていたEnglish Triposが制定されたわけだが、さらに改革の動きがでてきた。それは、英文学会が反対していた「Anglo-Saxon語必修の廃止」を修正する方向ではなくて、近代化傾向を一層強める動きであった。というのは、English Triposに関して他の学科の十分な協力が得られなかったことが一つの理由である。詳しく言えば次の通りである。English TriposではA、Bの二つのセクションを修得する方法と英語の一つのセクションと他のTriposの一つのパートを組み合わせる方法も可能であった。実際には、ClassicsなどのIst Partを取得後に、英語のA Section (近代・中世) 取得というケースが多く見られた。しかしClassicsのstaffは、学問としてのEnglishに対する軽蔑感が強く、そのために両者の協力関係は必ずしもうまくいかなかったといってよい。こういう動きに対処するために、近代部門から成り立つSection Cが附加され、学生はSection A、B、Cのうち二つのsectionを選択して、即ち、Chaucer以降を学ぶのみでHonours CourseのB. A. Degreeを取得することが可能となった。Section Aは英文学のみに整理され、また多くのpaperには指定書が明記され、より具体的となる。附加された近代部門Section Cは、比較文学的観点及び高度な専門的観点をもつことになった。その中にはそれまでSection Aに含まれていたTragedy paper及びcriticism paper、新たに附加されたpractical criticism及びQuiller-Couchの主張で新たに設けられたEnglish Moralistsのpaper等も含まれている。なかでもpractical criticismは1980年代においてもCambridge大学で確固たる位置をしめているが、それはI. A. Richards⁴²に唱道された批評方法として有名である。即ち、1917年English Schoolの講師 (lecturer) として採用されたI. A. Richardsは、従来の批評とは異った新しい批評の方法を、即ち、それまでの漠としていた研究方法を、学問的に厳密なものにしようとし、同時に文学の解釈・批評に際して、心理学を採用したのである。またI. A. Richardsを中心とするCambridgeの人々に高く評価された1920年代におけるT. S. Eliotの知的な文学は、感情を重視するロマン主義の文学から離れて、より知的な詩歌を求める傾向を助長させ、同時に批評論としてのpractical criticismへの傾向を助長させることにもなった。そういう批評をRichardsはCambridgeの学生に教えかつ実践していたが、それが1926年のEnglish Tripos改正を機に、Section AおよびSection Cにおいて正式に教育体制の中に取り入れられたのである。

このような新しいEnglish Tripos成立と同時に、Cambridge English Schoolは、それまでのFaculty of Medieval and Modern Languagesの一部門から、独立したFaculty of English (英文学部) へと大きく発展をとげる。

NOTES

1. この時期については, C. F. Firth, *The School of English Language and Literature : A Contribution to the History of Oxford Studies* (Oxford : Blackwell, 1909) を参考にして, 考察を進めた。
2. Firth, p. 16.
3. *Ibid.*, p. 16.
4. *Ibid.*, p. 17.
5. この時期については, Stephen Potter, *The Muse in Chains : A Study in Education* (London : Jonathan Cape, 1937) を参考にして, 考察を進めた。
6. Potter, p. 107.
7. *Ibid.*, p. 104.
8. *Ibid.*, p. 115.
9. *Ibid.*, p. 124.
10. *Ibid.*, p. 125.
11. *Ibid.*, p. 126.
12. *Ibid.*, p. 128.
13. *Ibid.*, p. 135.
14. *Ibid.*, p. 140.
15. *Ibid.*, p. 141.
16. *Ibid.*, pp. 153-54.
17. この時期については, 次の二つの研究書 Sir Charles Firth, *Modern Languages at Oxford : 1724-1929* (London : Oxford University Press, 1929) ; Sir Charles Firth, *The School of English Language and Literature : A Contribution to the History of Oxford Studies* (Oxford : Blackwell, 1909) を参考にして, 考察を進めた。
18. Firth, *Modern Languages.*, p. 55.
19. Firth, *The School*, p. 23.
20. *Ibid.*, p. 24.
21. O. E. D. はこれについて次のように説明している。
 Congregation : At Cambridge an assembly or meeting of the Senate. At Oxford a meeting of the Vice-Chancellor, Proctors, and 'Regent Masters' (*Ancient House of Congregation*), and of a regular meeting of the University. (The intension of the Act of 1854 was to enlarge the constitution and powers of the 'Ancient House of Congregation': it was held, however, by the legists that, instead of doing so, it had created a new body, 'the congregation of the University', leaving the 'Ancient House' intact. There are therefore now *two* congregations in the University.)
22. Firth, *The School*, p. 25.
23. Firth, *Modern Languages*, p. 71.
24. Firth, *The School*, p. 27.
25. *Ibid.*, p. 28.
26. O. E. D. はこれについて次のように説明している。
 Convocation : At Oxford and Durham : the great legislative assembly of the University, consisting of all qualified members of the degrees of M. A.; also, a meeting of this body (the earlier sense).
27. O. E. D. はこれについて次のように説明している。
 Tripos : *Cambridge University*. The final honours examination for the B. A. degree in *first* and *second tripos*, now the *Mathematical Tripos*, Parts I and II.) later, extended to the subsequently founded final honours examinations in other subjects. . . .

28. O. E. D.はこれについて次のように説明している。
Senate : In the University of Cambridge, and in some other British Universities, the official title of the governing body.
The Senate of the University of Cambridge corresponds to the convocation of Oxford University, and consists of Doctors, Masters of Arts, Law, and Surgery, and Bachelors of Divinity, who keep their names on the books.
29. F. Brittain, *Arthur Quiller-Couch : A Biographical Study of Q* (Cambridge University Press, 1947), p. 57.
30. E. W. Tillyard, *The Muse Unchained*(London : Bowes & Bowes, 1958).
31. Cambridge大学には総長 (Chancellor) はいるが、これは通例貴族が任命される名誉職的なもので (現在の総長はHis Royal Highness, The Prince Philip, Duke of Edinburgh), 実質的な権限は、各collegeの学長から互選される副総長 (Vice-Chancellor) が持つ。
32. Tillyard, p. 28.
33. *Ibid.*, p. 30.
34. *Ibid.*, p. 31.
35. *Ibid.*, p. 43.
36. *Ibid.*, p. 43.
37. *Ibid.*, p. 38.
38. *Ibid.*, p. 50.
39. *Ibid.*, pp. 56-57.
40. *Ibid.*, p. 57.
41. *Ibid.*, p. 59.
42. I. A. Richardsについては、別な章で詳しく論じる予定である。

(昭和62年 4月15日受理)